

診察室でスタッフと、生まれたばかりの赤ちゃんのケアをする矢島床子さん(右)。「産まされるお産」ではなく、「産むお産」をサポートしてきた彼女が、これまでにとり上げてきた赤ちゃんは約4000人にのぼる。

シリーズ

医療を担う 22



母と子のサロン  
矢島助産院  
矢島床子さん  
Yajima Yukako

「産むこと」を豊かにする「むかえびと」

## 助産師

女性にとって「妊娠」「出産」「子育て」という大事な時期に一貫して母子にかかわり、温かく見守ることで「子どもを育てる母」を育てます。医療や看護ではなく「健康な女性の性」を支え、「産む力」を引き出し、その後の人生の原風景となる「お産」をサポートします。

取材・文／古庄弘枝 撮影／吉川信之

母と子のサロン  
矢島助産院

あ

あ、また産みたい」この日のために生きてきたんだと思えるほど、すばらしい体験でした」自分のお産の体験が、自分の宝物になりました。これらの言葉が綴られているのは、矢島助産院に置かれた「お産の感想ノート」。すでに100冊に及ぶという同ノートには、ここで「お産」をした女性たちの感動と感謝に満ちた言葉の数々があふれています。

東京・国分寺駅から歩いて約10分。住宅地の中に「母と子のサロン 矢島助産院」はあります。院長は矢島床子さん。矢島さんは「フーリング・バース」を提唱しています。産むことを感じるお産です。女性が動物的本能を発揮できる貴重なお産という場で、「自分の体を自分のものとして実感」し、力を出し切って産む。そのような女性主体のお産です。「大好きな人たち」と、「好きな体位」でお産する女性たちにとって、同院でのお産は、その人の人生の「原風景」生きる力の源」ともなっています。

そんな原風景を作るために、

矢島さんが助産師として、自らとスタッフに課しているのが次の3原則です。①産婦を1人にしない。②いつも体のどこかに触れている。③産婦のすべてを受け入れる。否定しない。そして、同院では、お産間近になった37週以降の妊婦さんを対象に、「パワーをつけてお産に勝つ!!」と、参加者全員でカツ丼を食べる「Magiaのクラス」を月に2回開いています。

矢

鳥さんが目指すのは、「下駄（スリッパ）履きお産」に象徴される「地域と助産師のあり方」です。「先生、産まれそう」と、下駄履きのまま妊婦が助産院に駆け込んできてお産をする。自宅分娩のときは、赤ちゃんが生まれると近所の人たちが食べ物を持ち寄って、新しい生命の誕生を祝う、という時代もありました。

しかし、実際には、地域のあちこちで助産師が活躍する、そんな下駄履きお産ができる環境がどんどん失われているのが現状です。

助産師には、病院などの施設で働く勤務助産師と、開業助産

師とがいますが、後者の場合、開業するには、嘱託医（産婦人科医）と連携医療病院の確保が要件とされています。助産師による分娩介助が正常出産に限られているからです。

と

ところが、開業産科医の高齢化による廃業や、分娩の大病院への集約化政策などによって、助産師が開業を望んでも、嘱託医や連携医療病院が確保できないため、開業できない助産師が増えているのです。それは、とりもなおさず、「女性が地域の中でお産をすることができない」環境が失われていることにはほかなりません。

その状況にさらに拍車をかけているのが、「出産育児一時金



やじま・ゆかこ ●1945年、岐阜県生まれ。70年、日本赤十字社助産婦学校を卒業し、同社産院・高山赤十字病院に勤務。81年より「ラマーズ法」を広めた三森助産院で修業。87年に独立し、出張分娩のみの開業助産師に。90年、東京都国分寺市に「母と子のサロン 矢島助産院」を開業。現在、同院の院長。



母乳にいい「野菜が主役」の食事メニュー。食事は専任のスタッフによって、毎食、心をこめて手作りされる。

等（42万円）」の「医療機関等への直接支払制度」です。支払われるのが、お産の約2カ月後であることから、中小の医療機関の中には、その間の運営資金を借金で賄わねばならず、経営ができなくなり廃業するところが多いのです。そのため、ますます助産師が、開業しにくい状況になっています。

お

ばあちゃんのように、お母さんのように、あるいはお姉さんのように女性の傍らにいて、地域の中で、お産と子育てをサポートしたい「助産師になりたい学生・後輩を育てたい」という矢島さんにとって、今の日本のお産をめぐる状況は、「ほっとけない！」ことばかりです。「女性が地域の中で、元気に子どもを産んでいける現場を作るために、あと10年は頑張りたい」と矢島さんは言います。



無事、お産を終えた女性の部屋を訪れ、母と子に、祝福とねぎらいの言葉をかける矢島さん。生命を生み出す女性に寄り添って、終始「安心感」を与え続けてきた矢島さんの存在は、お産に続く子育てでも、頼もしい存在となる。



上／自宅でお産することを希望した人がいたときに持参する「出張セット」。いつでも出張可能なように、備品は常に点検され、バックされている。

下／助産に必要な「七つ道具」が詰まった「出張セット」の中身。聴診器や消毒薬など、助産師の「七つ道具」の数々。



分娩室でお産に必要なものを用意するスタッフ。この部屋で、妊婦は自分に合った姿勢で赤ちゃんを産む。日当たりのいい4畳半が当てられている。

## 助産師になるには

助産師になるにはさまざまな道があるが、まずは、看護師免許を取得していることが条件となる。主な道は二つ。一つは、高校卒業後、看護系専門学校や看護系短期大学に進み、卒業後、助産師養成所に進学・卒業、その後、助産師国家試験に合格し、助産師となる道。もう一つは、高校卒業後、「助産」課程のある看護系大学に進学し、助産師国家試験に合格して助産師になる道。問題は、助産師養成所が相次いで閉校し、多くが看護大学に吸収されていること。各県に1、2校しかなく、定員も15～35人と少ない。さらに、看護大学の場合も、その定員数が少なく設定されているため、助産課程に進むこと自体が「狭き門」となっている。